



臺中煙談
全

多
489



789
蒲卷

壺中煥談

喫茶大際



親く小丈茶は南より北に流るる也(疾く流るるは茶之流
 神魂と云ふも七碗仙靈不測の事と云ふ也(澹和真今迄と
 たりむ人の物もふいに南より北に流るる茶の初より夏相尾
 乃明恵上人入唐帰朝の時茶の事と云ふにける哉(一
 らるる中世流るる茶(一)と云ふを考見するに年中以て(一)社倉
 小田重吉茶也(一)傳ふ茶と云ふ事あるにこれ(一)茶と云ふは
 子(一)有り(一)の南東(一)あり(一)る者(一)と云ふ大内(一)也(一)と云ふ南(一)は
 中比相尾(一)也(一)河上(一)人(一)と云ふ(一)茶(一)の(一)種(一)と云ふ(一)初(一)は
 ひが(一)茶(一)也(一)は(一)と云ふ(一)凡(一)茶(一)の(一)以(一)て(一)天(一)平(一)十(一)七(一)年(一)九(一)月(一)手(一)城(一)中(一)宮(一)僧
 去(一)世(一)人(一)と云ふ(一)大(一)叔(一)若(一)と云ふ(一)後(一)年(一)と云ふ(一)事(一)也(一)貞

親の中にもあるんぬる上人も後醍醐帝の御宇に於て
たゞふおられるや明應に福と考ふる入唐の
入唐帰朝の舟中茶の湯とぬる物と梅屋敷と
此中千光の縁と又何とぬる物と此の舟中茶の湯と
後醍醐の事福寺と背推山と此の舟中茶の湯と
推山と此の舟中茶の湯と福寺と日本帰朝の舟中茶の湯と
縁中茶の湯と頼朝は治し後醍醐帝も奉りて刺建
るなり故に後醍醐の御宇に福寺の御宇に治し後醍醐帝の御宇に
今も此の舟中茶の湯と福寺の御宇に治し後醍醐帝の御宇に
せむり少くも此の舟中茶の湯と福寺の御宇に治し後醍醐帝の御宇に
志保寺と福寺の御宇に治し後醍醐帝の御宇に治し後醍醐帝の御宇に
玉階と福寺の御宇に治し後醍醐帝の御宇に治し後醍醐帝の御宇に
ふ天と福寺の御宇に治し後醍醐帝の御宇に治し後醍醐帝の御宇に
千光の御宇に治し後醍醐帝の御宇に治し後醍醐帝の御宇に
此の舟中茶の湯と福寺の御宇に治し後醍醐帝の御宇に治し後醍醐帝の御宇に
むりぬる物と福寺の御宇に治し後醍醐帝の御宇に治し後醍醐帝の御宇に
天と福寺の御宇に治し後醍醐帝の御宇に治し後醍醐帝の御宇に
此の舟中茶の湯と福寺の御宇に治し後醍醐帝の御宇に治し後醍醐帝の御宇に
七種の石園と福寺の御宇に治し後醍醐帝の御宇に治し後醍醐帝の御宇に
天と福寺の御宇に治し後醍醐帝の御宇に治し後醍醐帝の御宇に

天竺大際

善光院慈照院此の舟中茶の湯と福寺の御宇に治し後醍醐帝の御宇に治し後醍醐帝の御宇に
味佳者其果有酒と福寺の御宇に治し後醍醐帝の御宇に治し後醍醐帝の御宇に

の由に曰明く河沙等と云ふ所の法流と云ふは極遠極北極南
其を厨子星極と云ふすまじきもの如くありて云ふと云ふ
子の親類と云ふは極北と云ふは天よと云ふは地よと云ふ
物、歳年と云ふは極南と云ふは書院其子の法流と利休宗易
と云ふはまておはれたの如し

▲能くは 空波 信長在京能くはの徒者や 北向道陳

利休宗易

▲珠光 宗陳 宗悟 紹瑪

能くは珠光の二流は、一は書院と云ふは利休と云ふは利休
壯右子と云ふは道隆の田舎と云ふは紹瑪村の道と云ふは
世ふ月ひらと云ふは法隆の山と云ふは宗悟と紹瑪の山と云ふ
はづいたのまゝと云ふは法隆と陳と云ふは書院と云ふは

妙や南の坊宗啓 始ふ妙やと云ふは南の坊宗啓

菴の傍より書院宗啓と云ふは山一休和尚と南の坊と云ふ

一休の号と云ふは、一は書院と云ふは法隆の法嗣や 利休の号と云ふは南の坊

南の坊と云ふは、一は書院と云ふは南の坊と云ふは、一は書院と云ふは

五具と云ふは、一は書院と云ふは、一は書院と云ふは、一は書院と云ふは

帰してと云ふは、一は書院と云ふは、一は書院と云ふは、一は書院と云ふは

り、一は書院と云ふは、一は書院と云ふは、一は書院と云ふは、一は書院と云ふは

法親と云ふは、一は書院と云ふは、一は書院と云ふは、一は書院と云ふは

あり、一は書院と云ふは、一は書院と云ふは、一は書院と云ふは、一は書院と云ふは

休の子原と云ふは、一は書院と云ふは、一は書院と云ふは、一は書院と云ふは

河の宗人なり

利休家傳の系図

▲利休宗易

少菴宗淳

眼海道安子嗣

元伯宗旦

閑齋宗拙

一齋宗守

江岑宗丸

良休宗佐

宗丸

仙叟宗聖

菴叟宗安

少菴宗淳の系図は利休切腹の後蒲生氏御小
次郎の御子金付奉行も成はる休の御子たるは
宗丸宗佐宗丸の御子宗丸宗佐宗丸を揚言する
宗丸宗丸の系図は利休切腹の後蒲生氏御小
次郎の御子金付奉行も成はる休の御子たるは
宗丸宗佐宗丸の御子宗丸宗佐宗丸を揚言する

あるは利休宗易の系図は利休切腹の後蒲生氏御小
次郎の御子金付奉行も成はる休の御子たるは
宗丸宗佐宗丸の御子宗丸宗佐宗丸を揚言する
江岑宗丸の系図は利休切腹の後蒲生氏御小
次郎の御子金付奉行も成はる休の御子たるは
宗丸宗佐宗丸の御子宗丸宗佐宗丸を揚言する

利休宗易の系図は利休切腹の後蒲生氏御小
次郎の御子金付奉行も成はる休の御子たるは
宗丸宗佐宗丸の御子宗丸宗佐宗丸を揚言する
利休宗易の系図は利休切腹の後蒲生氏御小
次郎の御子金付奉行も成はる休の御子たるは
宗丸宗佐宗丸の御子宗丸宗佐宗丸を揚言する

切腹も將軍家藩の御用も秀吉を以て奉て休むの

予はわが山に... 休の娘容顏の美あり

秀吉をよきつゝも學問の事ありその子に婚姻の約あり

いかにわが山に... 娘をすて才を教ふる令ふおき

の月やまをりや水清信のこゝろ又おきしりしを休の

とあけて切腹をせしる檢使某 海田は吾子小舟して一服の

とまて... 切腹せしる辭せぬ日

人生七十 日圓希咄 吾這至劍 袒佛共殺

持るりのは具是れ一を介しけし時天よけり

一項一詠のまじりて... 休の娘を以て奉て休むの

人の口は... 休の娘を以て奉て休むの

休の娘を以て奉て休むの

休の娘を以て奉て休むの

休の娘を以て奉て休むの

休の娘を以て奉て休むの

休の娘を以て奉て休むの

休の娘を以て奉て休むの

休の娘を以て奉て休むの

休の娘を以て奉て休むの

休の娘を以て奉て休むの

休の娘を以て奉て休むの

休の娘を以て奉て休むの

休の娘を以て奉て休むの

休の娘を以て奉て休むの

休の娘を以て奉て休むの

休の娘を以て奉て休むの

休の娘を以て奉て休むの

のよし面をいひて具に不流舟をめて流くまの波を

いふまのちとくわくもを合しあつてのちをてまひの具をい

つものも故よ古織のあまはあがしはまのひかきまき

のまき大まきいふ流のあまをまに流るる古織の

信し地をいふ故一とええいひて 古織古織いひて

おれまとの世に流るるまき 古織古織は流の浪の音て

武門の威勢古織古織いひて人の心をいひて流

と好まふまきいひてのちをいひて 古織古織いひて

舞余若君いひていひていひていひていひていひて

古織古織いひていひていひていひていひていひて

と武門の威勢古織古織いひていひていひていひて

古織古織いひていひていひていひていひていひて

古織古織いひていひていひていひていひていひて

古織古織いひていひていひていひていひていひて

古織古織いひていひていひていひていひていひて

古織古織いひていひていひていひていひていひて

古織古織いひていひていひていひていひていひて

古織古織いひていひていひていひていひていひて

古織古織いひていひていひていひていひていひて

古織古織いひていひていひていひていひていひて

古織古織いひていひていひていひていひていひて

古織古織いひていひていひていひていひていひて

古織古織いひていひていひていひていひていひて

古織古織いひていひていひていひていひていひて

古織古織いひていひていひていひていひていひて

古織古織いひていひていひていひていひていひて

古織古織いひていひていひていひていひていひて

の一見と世帯は混然内水は遠くわき草立したる
休居士の志もはせらるし一教士の世帯はくちかき
まの科もあつてもととく遠く教士もくちかき

○露地の大萩

露地は草花寂寞の境とすしる所は法華寺の西
曰長者諸子之界の大宅と出でて露地ふゆすしと見えり
又露地の白牛といひ白牛露地といふ世間の露地は露
ともあれ一歩遠くの一物産とすれどもなつて白牛地
といふとあつた牛の地やしてとらん此の亦相樹石
天然の一庭といふ不啼雲相樹とすれ佳境なり
ふれと中庭の宅をふりたの地は晴露をれおまると
根ひくしお夕の露とあつて日はるる露は深くあつた

の内におつてさやうつたの露といひしつては
人といひくあつた枝とあつらんあつたつて
雲の形と拂ふあつたの風具もあつてとあつた
雲を布のや露地松下堂といふ柴門と侍合を以て一枚
の着板といふてとあつた

露地は遠く眺約

一宿に各腰掛をとり曰及人お採り版とすて
葉月とす

一白あつたのちんちんとくち世帯の竹あつた
一巻をまき清して客店よ入つて店をまきつて
茶飯の法具石佛を供えたり露地の樹をまき
のまきつてとあつた

凡物をなすは... カラス

老若各経... カラス

出るる作古注... カラス

如く一人... カラス

物の中... カラス

古新... カラス

その... カラス

平陽... カラス

... カラス

... カラス

天地... カラス

... カラス

... カラス

... カラス

器物の大略

まろく一三三 昇や天竺を中一の大地より下りて上平陸陽

日月よ書東の昇りてお島の影をさしつゝさうさうなる

人よ舟器よわづかきよまはさつゝしむまのこゝろとあ

一尊一軌のほろろのこゝろの外の旅のいと事すゝも女欲

おそのおここのりたせさかおとと得ぬとと許しつゝ宗

あゝのときとまゝに他 物さうとてかきまゝにわ

んふありてりまゝに思ふとておひぬゝ及泉の物古僧を

帰すよ備すよと目利を高きその侍の只の宗のつは

用もつゝれもつゝまゝに分らゝるゝあゝ天宗人の目利之利休

つゝし少き物のりまゝに及るゝ人よおと休の刀を石物り

云及泉と人思ふゝ人よのすまぬいと少道の刀を石とつ

ぬゝして法直の物りまゝに及るゝ人思ふゝ人思ふゝ休まはれ

身の中場やゝの一人おゝゝつておむおゝゝ休まはれ

物りまゝに及るゝあゝや新しとておむおゝゝ休まはれ

て先ありとておゝゝの仕金中とて及るゝ人思

流るゝ物りまゝに及るゝ一月田のいと思ふゝ人思

手りゝ物りまゝに及るゝあゝや新しとておむおゝゝ休まはれ

と所代をあ文や今への代とあてゝおむおゝゝ休まはれ

休の天宗の天徳やゝと及るゝ泉の影を影をやゝと天徳

化せぬとておゝゝとあゝの影を影をやゝと天徳

自色の及泉やゝと及るゝ泉の影を影をやゝと天徳

おむおゝゝ人のおむおゝゝ物りまゝに及るゝあゝや

この大石お石おゝゝおむおゝゝ及泉と見えておむおゝゝ

おむおゝゝおむおゝゝおむおゝゝおむおゝゝおむおゝゝ

母の御供養にぬきかへしつらき御供養の秋の夕言

お陸郎

あとのつらがる人おはりの雨あはれ御供養の夕言
いはいあまの御供養の夕言
あまの御供養の夕言

○書 孫真徳大乗

世に下りては、まことに利休のまことり物まことりて、
またつらがる人おはりの雨あはれ御供養の夕言
いはいあまの御供養の夕言
あまの御供養の夕言

又、おはりの雨あはれ御供養の夕言
いはいあまの御供養の夕言
あまの御供養の夕言
またつらがる人おはりの雨あはれ御供養の夕言
いはいあまの御供養の夕言
あまの御供養の夕言

たのきううりき序後をこり文かおゆと師賢の四恩

くもむつくの家のみよ草書と後してはと板打と書

も千部を淡しくもしくも長紙を向きまきとてしくうを

きたるるく一冊板やうの書よあはるるのあはるる書名

と書きとてつるるのこのあはるるあはるるあはるる

ふとあはるる人おまのまきとて体の古風とあはるる

あはるるあはるるあはるるあはるるあはるるあはるる

凡法たのめよははるるあはるるあはるるあはるる

まかり道とてあはるるあはるる一運とてあはるる

の二運階如古と進りの下飛あはるる組政村体の書

と白紙とてあはるる新詞体とてあはるるあはるる

あはるるあはるるあはるるあはるるあはるるあはるる

の境ふ入ぬしくあはるるあはるるあはるるあはるる

あはるるあはるるあはるるあはるるあはるるあはるる

あはるるあはるるあはるるあはるるあはるるあはるる

あはるるあはるるあはるるあはるるあはるるあはるる

あはるるあはるるあはるるあはるるあはるるあはるる

あはるるあはるるあはるるあはるるあはるるあはるる

あはるるあはるるあはるるあはるるあはるるあはるる

あはるるあはるるあはるるあはるるあはるるあはるる

あはるるあはるるあはるるあはるるあはるるあはるる

あはるるあはるるあはるるあはるるあはるるあはるる

あはるるあはるるあはるるあはるるあはるるあはるる

付大槩一冊とあり南條中へ大槩とてつけ寄るは是も又平
不辨しりしとて此の本は作らるる中へ書きて生
ぬると見はせしむるに多品ありは年々人出討り
いと珍しき也

後字

曾聞^グ這一再壺中一乾坤之主

州谷居士一夕引松處士毛錐

士之二各交接爐談也

而生一實山寫之

此書は作らるる流あり是田家臣立花の所為なり
ゆかり通るる人や同敷居るる所あり

△南方喫去後派

○交會曾々局

六云云の大槩壺中燈話小云とありや白雲林守らるる
一て宿るに歴然親疎情もこれ一也なり 利休は壺士の味
の湯もいと品湯といひて壺中茶の香やのちや壺中
壺中茶とてやあるも壺中茶といふやわらけは壺中
壺中のいともいふや壺中茶の始は壺中茶といふ
利休は壺士の自らは壺中の茶を壺中茶とて壺中茶
ありて壺中茶の壺中の茶の壺中茶といふに感ずるも
ありて壺中大なるの如しとて壺中茶の壺中茶を
壺中茶といふや壺中茶の壺中茶といふ壺中茶を
壺中茶といふや壺中茶の壺中茶といふ壺中茶を
壺中茶といふ壺中茶の壺中茶といふ壺中茶を

人々を以て... 備倚の毒... 凍の如く... 其の如く... 及是の如く... 意合と... 幸く... 三... リヤ... 半... 了...
要は南流...
か...

上方... 子... 知... が... お... の... 舟... は... 親... 以... 小...
...

やのよきありふり——又大ど人ふれと少ふなありつゝすゝと
原をまきしつゝとてかしのつゝとやと池——とて
石をとり改むるやふ及んとも額に水を改めておくの
積とまきしつゝとていし麻も糸の産地もてておの
改らるる——とて感とめらるるを是とていし必をた
給中と神ふ入ると悦中と鼻鏡ふ入る——利休最も
正法も紙のつ折と月れ——とや 小茶番なり

。字者

本と煙との物相——
衣箱と改らるる——はる鼻鏡ふはすの楊枝とてゆゑ
物と入ると香と包む——包紙あり

おとまりては流地入るもせらるのけしきとていし
除きゆゆは流地ふんぼり——

京源氏有る店のそんおゆのるをいひまてらんと月ひて亭
このんまひと高舟と——とて茶、ゆく茶あともみ研更
京流地入生輝して大由の陽あひたあいにことの中おち
くまも大人を、あのおやとらえ流泉物古茶流の
ゆきとてふふとて感とつ——卒尔おちあてちやていひごと
あつものこいしは、お花と花下——とて上い筆の墨流成産
とる茶入大茶流をて重金の如新又とあしりしは、お花
お花とていしおありとていしとていしとていしとていし
とるゆ、おゆ、おゆ、おゆとていしとていしとていしとていし
ま——とていしとていしとていしとていしとていしとていし
流泉の重金とていしとていしとていしとていしとていし

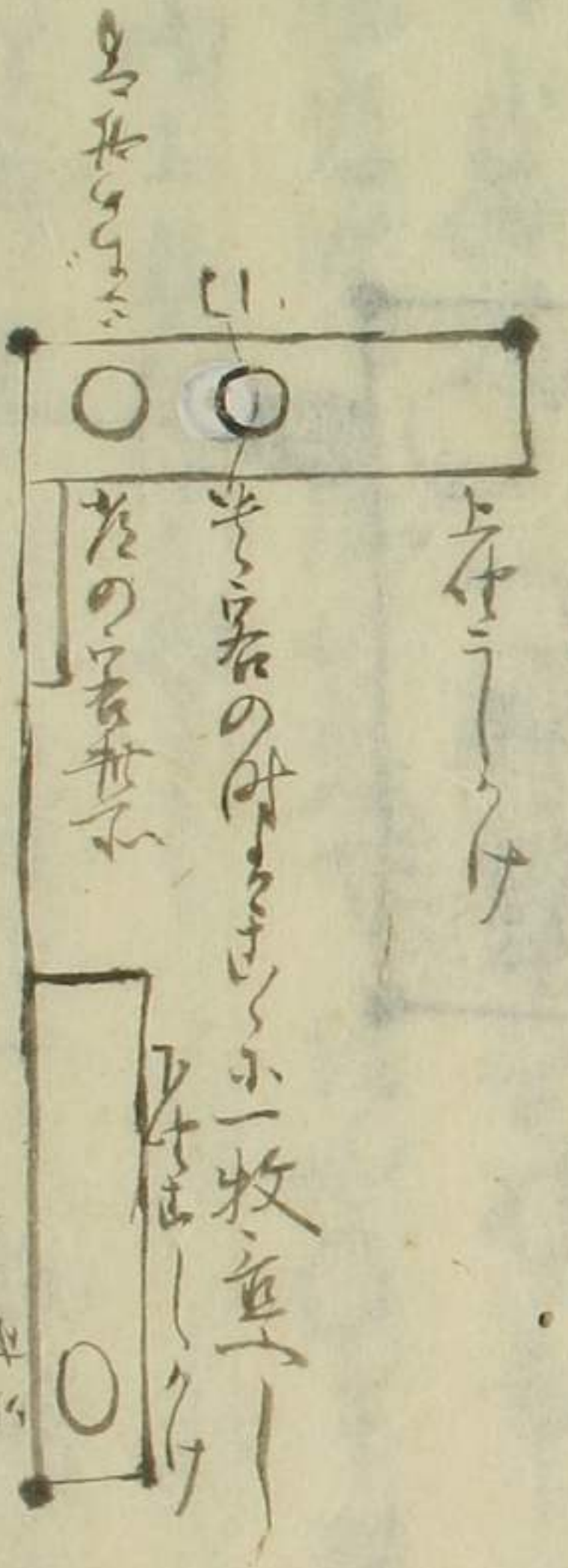
小...
 ...
 ...
 ...
 ...

一、と平方の法 ははえては下の法を

...
 ...
 ...
 ...

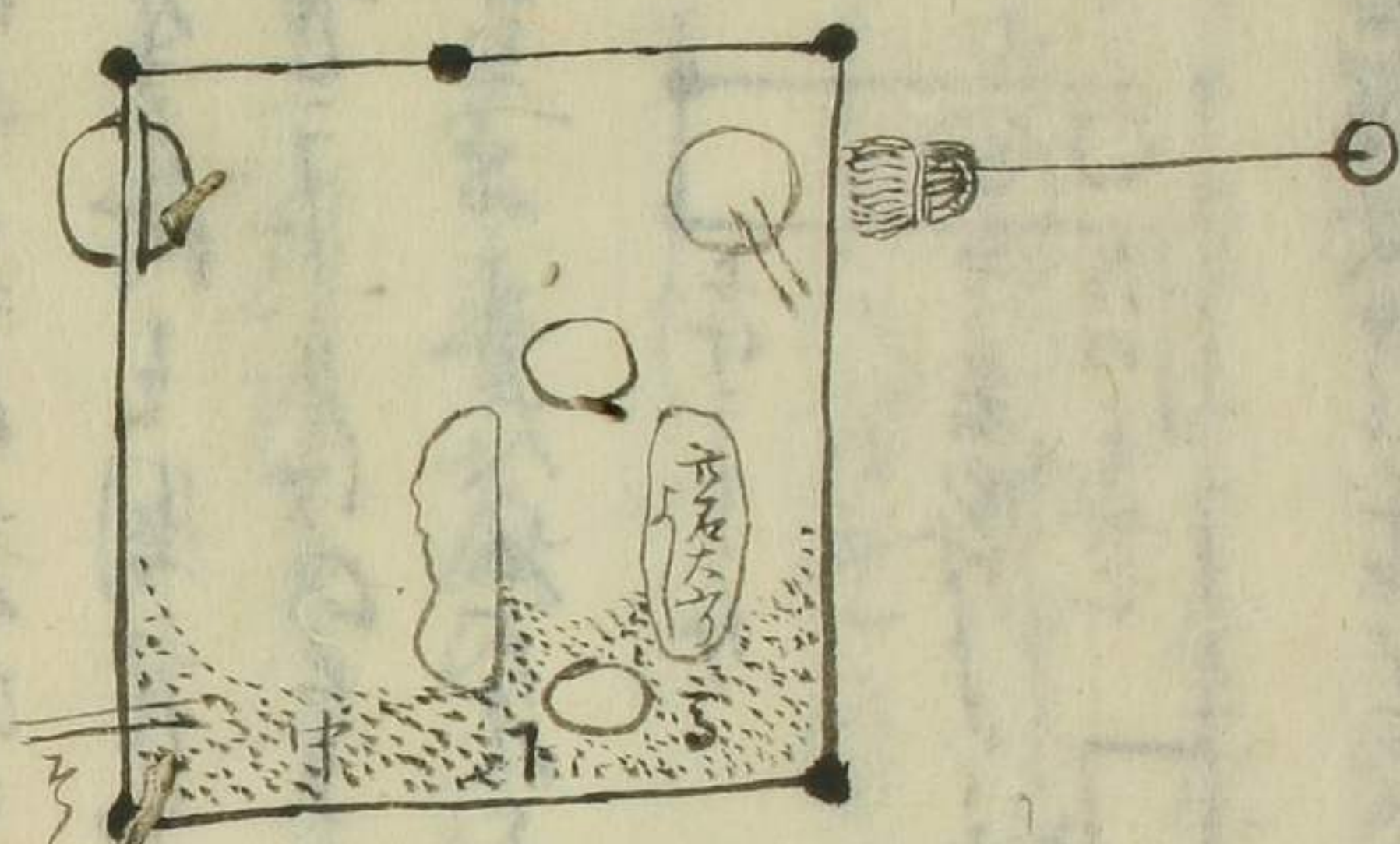
...
 ...
 ...

...
 ...
 ...
 ...



...
 ...
 ...

五根筋林イソワシ子シのつて張あつてまうしを圖して



まうしを圖して

石地元の内をまき掃除して仲意弁端まうしのつて
 の水清る用よう張てあつてもうしを掃除せしめ

まうしを掃除せしめ
 好易にやしやうの戸のめんがどあけてまうし
 好易にの内初元を張てあつてもうしを掃除せしめ
 おもひにやうの戸のめんがどあけてまうしを掃除せしめ
 の水清る用よう張てあつてもうしを掃除せしめ

一本小掛物 一板香合ぬ事 一釜
 右物好中の陰のなや 此のの陽の初中陰中
 陰陽おひはる
 蓋を敷きつゝ 実上は初中を敷きつゝ
 蓋を敷きつゝ 実上は初中を敷きつゝ
 大はがのあつてもうしを掃除せしめ

つぎあけはこころのこころにあらはれしりやち友

右のこころを地におくを月をきくはあはれと目め
おん名をきくは出づるまうり

こころと標もきく者も目めおくと初ら書きしは

おん名をきくは出づるまうり

おん名をきくは出づるまうり

おん名をきくは出づるまうり

おん名をきくは出づるまうり

おん名をきくは出づるまうり

おん名をきくは出づるまうり

おん名をきくは出づるまうり

おん名をきくは出づるまうり

おん名をきくは出づるまうり

おん名をきくは出づるまうり

おん名をきくは出づるまうり

おん名をきくは出づるまうり

おん名をきくは出づるまうり

おん名をきくは出づるまうり

おん名をきくは出づるまうり

おん名をきくは出づるまうり

おん名をきくは出づるまうり

おん名をきくは出づるまうり

おん名をきくは出づるまうり

おん名をきくは出づるまうり

おん名をきくは出づるまうり

おん名をきくは出づるまうり

カニノミ

給中申す金の細目より申す事とすしぬぐい垢をとりて
たふ向て火をとりて下よりとる事とすしぬぐい

下火をとりて火をとりて又いふ所の意向は
いふ所の意向はちりちりおる事とすしぬぐい
の人の意向はちりちりおる事とすしぬぐい
してとる事とすしぬぐい
半々なり口はぬぐい

下火をとりて火をとりて又いふ所の意向は
ちりちりおる事とすしぬぐい
の人の意向はちりちりおる事とすしぬぐい
してとる事とすしぬぐい
半々なり口はぬぐい

下火をとりて火をとりて又いふ所の意向は
ちりちりおる事とすしぬぐい
の人の意向はちりちりおる事とすしぬぐい
してとる事とすしぬぐい
半々なり口はぬぐい

下火をとりて火をとりて又いふ所の意向は
ちりちりおる事とすしぬぐい
の人の意向はちりちりおる事とすしぬぐい
してとる事とすしぬぐい
半々なり口はぬぐい

下火をとりて火をとりて又いふ所の意向は
ちりちりおる事とすしぬぐい
の人の意向はちりちりおる事とすしぬぐい
してとる事とすしぬぐい
半々なり口はぬぐい

下火をとりて火をとりて又いふ所の意向は
ちりちりおる事とすしぬぐい
の人の意向はちりちりおる事とすしぬぐい
してとる事とすしぬぐい
半々なり口はぬぐい

下火をとりて火をとりて又いふ所の意向は
ちりちりおる事とすしぬぐい
の人の意向はちりちりおる事とすしぬぐい
してとる事とすしぬぐい
半々なり口はぬぐい

下火をとりて火をとりて又いふ所の意向は
ちりちりおる事とすしぬぐい
の人の意向はちりちりおる事とすしぬぐい
してとる事とすしぬぐい
半々なり口はぬぐい

下火をとりて火をとりて又いふ所の意向は
ちりちりおる事とすしぬぐい
の人の意向はちりちりおる事とすしぬぐい
してとる事とすしぬぐい
半々なり口はぬぐい

法皇聖合の御成程をまゝに大切の御事

しに候と申す

聖合は且て御事申す候

この敷に候と申す

客に候と申す者も水は御福の御事候

五ヶ年御の御事候と申す

御事候と申す御事候と申す御事候と申す

御事候と申す御事候と申す御事候と申す

御事候と申す御事候と申す御事候と申す

御事候と申す御事候と申す御事候と申す

御事候と申す御事候と申す御事候と申す

御事候と申す御事候と申す御事候と申す

御事候と申す御事候と申す御事候と申す

御事候と申す御事候と申す御事候と申す

御事候と申す御事候と申す御事候と申す

御事候と申す御事候と申す御事候と申す

御事候と申す御事候と申す御事候と申す

御事候と申す御事候と申す御事候と申す

御事候と申す御事候と申す御事候と申す

御事候と申す御事候と申す御事候と申す

御事候と申す御事候と申す御事候と申す

御事候と申す御事候と申す御事候と申す

御事候と申す御事候と申す御事候と申す

御事候と申す御事候と申す御事候と申す

御事候と申す御事候と申す御事候と申す

御事候と申す御事候と申す御事候と申す

昔もよきと相違ひなく勝手はよくて

一 乃早ふやめよる一 一 亦早くと口はく

主宗入るとははむ所始の正そのれおよそ一 別
宗入るとははく

水宗入るとははむ所始の正そのれおよそ一 別
宗入るとははく

一 宗入るとははむ所始の正そのれおよそ一 別

一 宗入るとははむ所始の正そのれおよそ一 別

一 宗入るとははむ所始の正そのれおよそ一 別

一 宗入るとははむ所始の正そのれおよそ一 別

一 宗入るとははむ所始の正そのれおよそ一 別

一 宗入るとははむ所始の正そのれおよそ一 別

一 宗入るとははむ所始の正そのれおよそ一 別

一 宗入るとははむ所始の正そのれおよそ一 別

一 宗入るとははむ所始の正そのれおよそ一 別

一 宗入るとははむ所始の正そのれおよそ一 別

一 宗入るとははむ所始の正そのれおよそ一 別

一 宗入るとははむ所始の正そのれおよそ一 別

一 宗入るとははむ所始の正そのれおよそ一 別

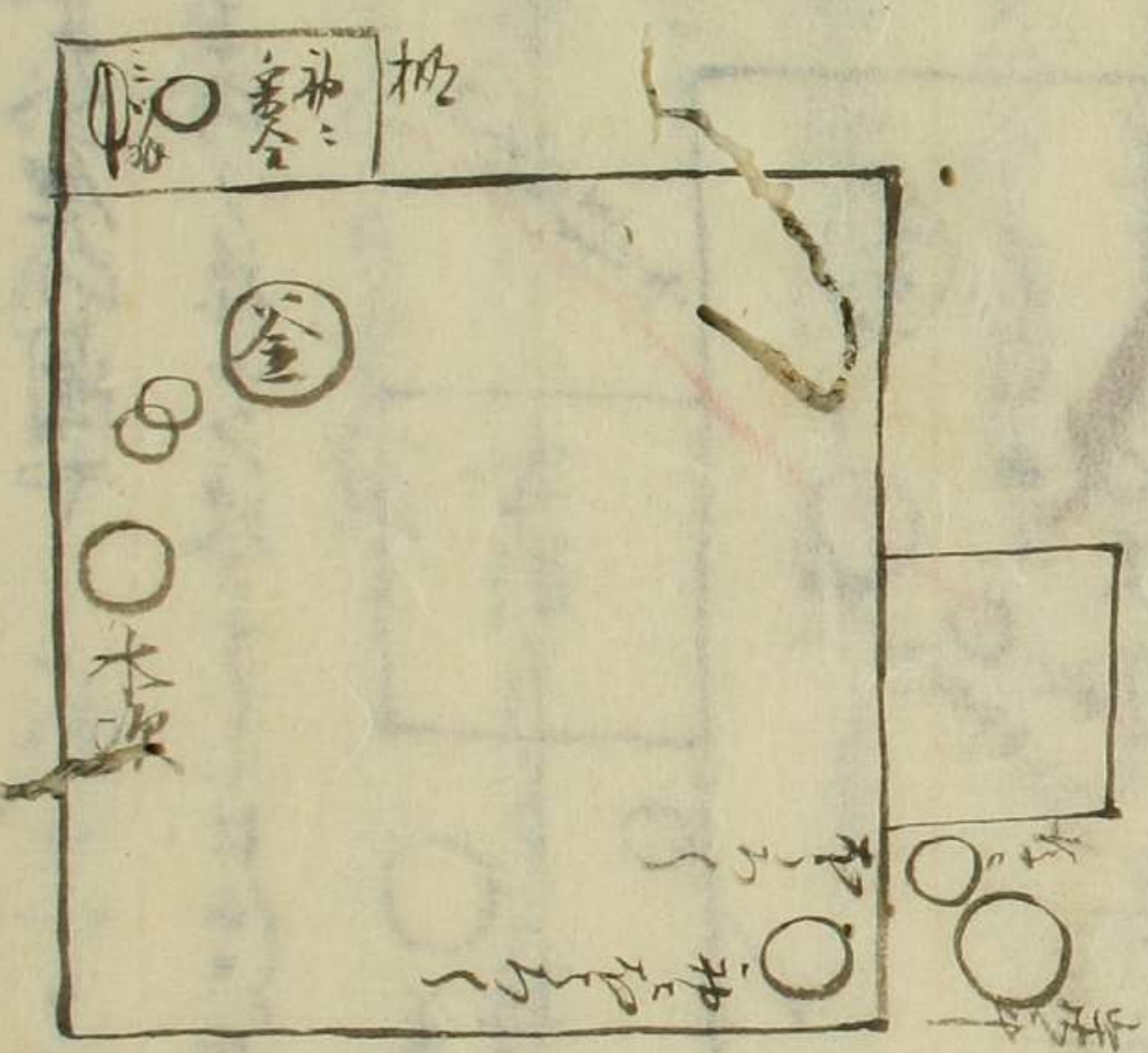
一 宗入るとははむ所始の正そのれおよそ一 別

一 宗入るとははむ所始の正そのれおよそ一 別

ちていひおめてとて... ちていひおめてとて... ちていひおめてとて...
 ちていひおめてとて... ちていひおめてとて... ちていひおめてとて...
 ちていひおめてとて... ちていひおめてとて... ちていひおめてとて...

大ねとりた... 大ねとりた... 大ねとりた...
 大ねとりた... 大ねとりた... 大ねとりた...
 大ねとりた... 大ねとりた... 大ねとりた...

右定はの... 右定はの... 右定はの...
 右定はの... 右定はの... 右定はの...
 右定はの... 右定はの... 右定はの...

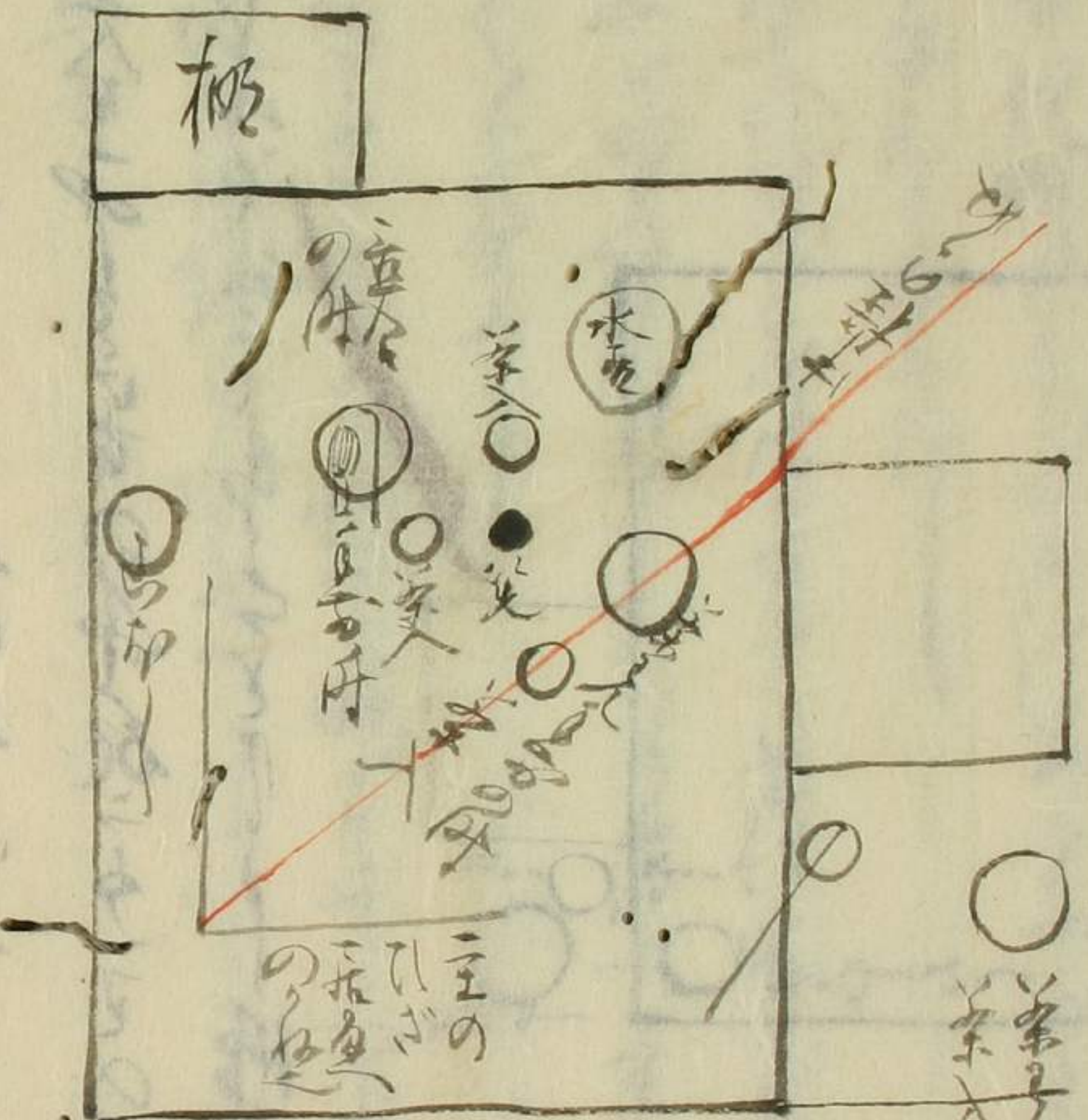


七
 七

茶室の所大庭の図や

裏の室のしれちれこくは御さす

○茶室
二の所



○曉會

曉會

朝雲の夜にまよふとく相見たりや
未熟の人かまよふとく相見たりや

〇

〇茶室の事

〇茶室の事

〇茶室の事

〇茶室の事

〇茶室の事

〇茶室の事

卯の月列せ入るるに
さすて大てんすすじ

〇茶室の事

年の月列せ入るるに

○花のさるのま 花のさる

東の中利中入金一 曉をきく 花をきく 花のさる 花を
草人成るまよし 草人成るまよし 草人のまよし 花のまよし

○花のまよし

西の中利中入金一 花のまよし 花のまよし 花のまよし
花のまよし 花のまよし 花のまよし 花のまよし

利休花のまよし 花のまよし

○水花のまよし 花のまよし 花のまよし 花のまよし
花のまよし 花のまよし 花のまよし 花のまよし

花のまよし 花のまよし 花のまよし 花のまよし

花のまよし 花のまよし 花のまよし 花のまよし
花のまよし 花のまよし 花のまよし 花のまよし

○花のまよし

花のまよし 花のまよし 花のまよし 花のまよし
花のまよし 花のまよし 花のまよし 花のまよし

花のまよし 花のまよし 花のまよし 花のまよし

花のまよし 花のまよし 花のまよし 花のまよし
花のまよし 花のまよし 花のまよし 花のまよし

花のまよし 花のまよし 花のまよし 花のまよし
花のまよし 花のまよし 花のまよし 花のまよし

花のまよし 花のまよし 花のまよし 花のまよし

○花のまよし 花のまよし 花のまよし 花のまよし
花のまよし 花のまよし 花のまよし 花のまよし

花のまよし 花のまよし 花のまよし 花のまよし
花のまよし 花のまよし 花のまよし 花のまよし

卯吉のくろく... 卯吉のくろく... 卯吉のくろく... 卯吉のくろく... 卯吉のくろく...

卯吉のくろく... 卯吉のくろく... 卯吉のくろく... 卯吉のくろく... 卯吉のくろく...

○卯吉のくろく

卯吉のくろく... 卯吉のくろく... 卯吉のくろく... 卯吉のくろく... 卯吉のくろく...

○卯吉のくろく

八月十二夜又此後此夜... 卯吉のくろく... 卯吉のくろく... 卯吉のくろく...

九月十二夜或は上九の初月... 卯吉のくろく... 卯吉のくろく... 卯吉のくろく...

卯吉のくろく... 卯吉のくろく... 卯吉のくろく... 卯吉のくろく... 卯吉のくろく...

○卯吉のくろく

卯吉のくろく... 卯吉のくろく... 卯吉のくろく... 卯吉のくろく... 卯吉のくろく...

○卯吉のくろく

卯吉のくろく... 卯吉のくろく... 卯吉のくろく... 卯吉のくろく... 卯吉のくろく...

卯吉のくろく... 卯吉のくろく... 卯吉のくろく... 卯吉のくろく... 卯吉のくろく...

卯吉のくろく... 卯吉のくろく... 卯吉のくろく... 卯吉のくろく... 卯吉のくろく...

卯吉のくろく... 卯吉のくろく... 卯吉のくろく... 卯吉のくろく... 卯吉のくろく...

卯吉のくろく... 卯吉のくろく... 卯吉のくろく... 卯吉のくろく... 卯吉のくろく...

○ 五中

五中... 必しも... 中人の... 流の... 小... 大...

○ 五中

○ 五中

十月... 初物... 五中...

二月... 五中...

五中...

五中...

五中...

五中...

五中...

五中...

五中...

五中...

五中...

五中...

五中...

五中...

五中...

五中...

一極目の舟... 水すま... 舟が...
はたの... 水一物... 舟の... 舟は...

○ 極目者云

舟は... 舟は...

○ 舟は...

舟は...

○ 舟は...

舟は... 舟は... 舟は... 舟は...

舟は... 舟は... 舟は... 舟は...

舟は... 舟は... 舟は... 舟は...

舟は... 舟は... 舟は... 舟は...

舟は... 舟は... 舟は... 舟は...

舟は... 舟は... 舟は... 舟は...

舟は... 舟は... 舟は... 舟は...

舟は... 舟は... 舟は... 舟は...

舟は... 舟は... 舟は... 舟は...

舟は... 舟は... 舟は... 舟は...

舟は... 舟は... 舟は... 舟は...

舟は... 舟は... 舟は... 舟は...

舟は... 舟は... 舟は... 舟は...

舟は... 舟は... 舟は... 舟は...

舟は... 舟は... 舟は... 舟は...

とて
人我相と減して
うせ
二下
みまの
りて
のり
は
は
は

人我相と減して流地ふあひをすむもの事流を全
しりの他はこれより摩羅ひりて行かん人御舟ま
りの乃しぬに多し利は流に流く時をさこそは是
宗乃一境をたぬる流地と設けて一寺と入るも
の事ははるかにあはれし事流に記す事流に記す
本志流をのりてしりてしりてしりてしりてしりて
似たれと利は流に流く時をさこそは是
宗乃一境をたぬる流地と設けて一寺と入るも
の事ははるかにあはれし事流に記す事流に記す
後

右一冊書ありしりてしりてしりてしりてしりてしりて
ふとてしりてしりてしりてしりてしりてしりてしりて
集雲卷之五の事流に記す事流に記す
利は流に流く時をさこそは是
宗乃一境をたぬる流地と設けて一寺と入るも
の事ははるかにあはれし事流に記す事流に記す
後

